

Contents

\*\*\*\*\*

特集：共和党大会と政策綱領を読む	1p
< 今週の”The Economist”誌から >	
”Je ne regrette rien” 「我、後悔せず」	8p
< From the Editor > 「アテネ五輪新世代」	9p

\*\*\*\*\*

特集：共和党大会と政策綱領を読む

アテネ五輪が終わり、興奮の夏が過ぎると同時に、米国では共和党大会が始まりました。あれほど遠くに思われた本選挙の投票日(11月2日)は、もう2ヵ月後です。米国大統領選挙は、文字通り第4コーナーを回ったといついでいいでしょう。

7月末の民主党大会は、「小異を捨てて大同につけ」といわんばかりに、党の総力をあげて「勝てるケリー候補」を演出しました。対する共和党は準備万端、さまざまな工夫でケンカ上手なところを見せてつけています。今週号では、ブッシュ大統領の受諾演説の分析は間に合いませんが、見える範囲の材料で共和党戦略を読み取ってみたいと思います。

ややリードで迎えた共和党大会

「今日が投票日であれば、ケリーが勝つんでしょうね」

7月下旬、某共和党系ロピイスト氏は、少し悔しそうに筆者にそう言ったものである。実際、8月の中旬くらいまで、各種世論調査の結果は「ケリーやや優位」を伝えていた。そうでなくても、最終局面になって投票行動を決める無党派層は、現職よりは挑戦者に投票する傾向がある。調査結果がイーブンであれば、現職やや不利と読む必要がある。

ところがここへ来て、調査の数字は「ブッシュややリード」に変わってきた。これはそう不思議なことではない。それまで、ケリー候補についてはあまり情報がなく、「反ブッシュ論者=ケリー支持」という構図が成立していた。しかし民主党大会が終わり、ケリー候補の人柄や政策が有権者に浸透するにつれ、「ブッシュは嫌いだが、ケリーも今ひとつ」という有権者が増えてくる。そしてこれこそが、共和党側の思う壺でもあるわけだ。

## 8月の世論調査から

Date	Poll	Bush支持 / 不支持	BushX KerryX Nader
Aug 3-4	Fox News/Opinion Dyn	43 / <b>48</b>	42 X <b>46</b> X 2
Aug 3-5	AP/Ipsos	49 / <b>50</b>	45 X <b>48</b> X 3
Aug 3-5	Time	<b>50</b> / 46	42 X <b>47</b> X 6
Aug 5-10	Pew/Princeton	<b>46</b> / 45	45 X <b>47</b> X 2
Aug 9-11	CNN/USA Today/Gallup	<b>51</b> / 46	<b>46</b> X 45 X 5
Aug 15-18	CBS News	<b>46</b> / 45	45 X <b>46</b> X 1
Aug 21-24	LA Times	<b>52</b> / 47	<b>47</b> X 44 X 3
Aug 23-25	NBC/Wall St. Journal	47 / <b>48</b>	<b>47</b> X 45 X 3
Aug 23-25	CNN/USA Today/Gallup	<b>49</b> / 47	<b>48</b> X 46 X 4

8月にはベトナム帰還兵たちが、「Swift Boat Veterans for Truth.」「真実のための元高速艇乗り組み員たち」という組織を作り、ケリー候補のベトナム従軍体験に誇張があると訴え始めた<sup>1</sup>。この団体は、共和党の別働隊との見方が絶えないのだが、「ケリーがベトナムで従軍したのは4ヶ月に過ぎない」「3つのパープル・ハーツ(名誉の負傷)勲章は、重傷ではなかった」などの事実が知れわたっただけでも、「輝かしい軍歴」の値打ちは低下したようだ。

そもそも世論調査を詳細に見ていくと、ケリーの支持率は普通の人よりもベテラン(元軍人)の方が低い。察するに従軍体験を持つ人たちは、誰もが戦場で苦勞をしているので、自分の武勲を強調する人を割り引いて見る傾向があるのだろう。むしろ軍隊を知らない人の方が、他人の従軍体験を素直に評価するらしい。

2004年選挙は「ブッシュの信任投票」という性質を帯びている。「ブッシュは再選に値せず」と有権者が判断した場合、それに代わる候補者の資質をチェックする必要がある。8月にケリーの支持率がやや低下したのは、それだけ有権者の認知が高まったことの表れなのであろう。たとえばケリーが、「(すべての情報を知っていたとしても)イラク攻撃に賛成したかもしれない」と発言したことは、上院議員としての過去の発言と照らし合わせると不思議はないのだが、彼をよく知らない人にとっては失望材料となった可能性がある。

## 共和党戦略は「穏健派の取り込み」

民主党の党大会における課題はケリー候補を売り込むことだったが、共和党は今さらブッシュ大統領を売り込む必要はない。むしろ党大会で重要なのは、「共和党寄りの考え方を持たせよう、ブッシュ政権に異和感を持つ人々」を味方につけることである。言葉を変えれば、コアの支持層である草の根保守派の機嫌を損ねない程度に、中道寄りの穏健層にアピールする必要がある。

<sup>1</sup> <http://www.swiftvets.com/> ケリー批判CMも見ることができる。

その辺の配慮は、共和党大会の主要スピーカーの顔ぶれからも読み取ることができる。

### 共和党大会の”Prime Time Lineup”

8月30日（月）	マイケル・ブルームバーグ（ニューヨーク市長） ルディ・ジュリアーニ（ニューヨーク前市長） ジョン・マケイン（上院議員 / アリゾナ州選出）
9月1日（火）	ローラ・ブッシュ（大統領夫人） ロッド・ペイジ（教育長官） アーノルド・シュワルツネッガー（カリフォルニア州知事）
9月2日（水）	リン・チェイニー（副大統領夫人） ディック・チェイニー（副大統領） ゼル・ミラー（上院議員 / ジョージア州選出）
9月3日（木）	ジョージ・パタキ（ニューヨーク州知事） ジョージ・ブッシュ（現大統領）

「9/11」で国民的英雄になった地元のジュリアーニ前市長、超党派で人気があるマケイン上院議員、国民的な支持の高いファーストレディであるブッシュ夫人など、好感度の高い顔ぶれをずらりと並べている。 ”Prime Time Lineup” というところがミソで、3大ネットワークがカバーする時間帯に上記のような「全国区」の顔ぶれを集中する。党内で受けのいいタカ派にはそれ以外の時間帯に出番を与え、会場に集まった支持者たちの「ガス抜き」を図るのである。この点は、民主党大会で使われた手法とまったく対称をなしている。

思い切った冒険としては、大会の基調演説で民主党のゼル・ミラー上院議員を起用したことがある。民主党側は、若きスターであるオバマを抜擢して成功を収めたが、共和党は1992年にクリントンを送り出した民主党大会で基調演説を行ったミラーを引き抜いた。以前から対テロ政策や減税問題で、ブッシュ政権を強く支持してきた議員である。暗に「ケリーは左派過ぎる」「ブッシュこそ主流である」ことを印象付ける作戦である。

閣僚スタッフでは、アフリカ系のペイジ教育長官を登場させる一方、人気のあるパウエル国務長官を使わなかった。これは本人が辞意を固めているからというよりも、ラムズフェルド国防長官を使わないこととのバランスを取ったのではないだろうか。

### シュワちゃんが共和党を再定義する

個人的に興味深く感じたのは、アーノルド・シュワルツェネッガー知事の登板機会である。大スターゆえに、「人寄せパンダ」的な役回りを期待されるのは当然だが、今回の「シュワちゃん」の役割はそれだけにとどまらない。

彼はカリフォルニア州という大票田を背負っており、背後には「西部の穏健派共和党員」がついている。ブッシュのコア支持層は「南部の保守派共和党員」であり、両者の間には人工中絶や銃規制、同性愛結婚の是非など、社会問題をめぐる意見対立がある。「シュワちゃん」に期待された役割は、これら右と左の共和党員の「橋渡し」を務めることであった。

シュワルツェネッガー知事はスピーチの中で、オーストリア移民としての過去、米国市民になったときの感動、そして共和党員になった経緯を語り、「わが同輩の移民諸君」に対して「共和党とは何か」を以下のように語りかけている<sup>2</sup>。

My fellow immigrants, my fellow Americans, how do you know if you are a Republican? Well, I tell you how. If you believe that government should be accountable to the people, not the people to the government, then you are a Republican. (個人の自由と政府への不信)

If you believe a person should be treated as an individual, not as a member of an interest group, then you are a Republican. (反・利益団体)

If you believe your family knows how to spend your money better than the government does, then you are a Republican. (減税と小さな政府)

If you believe our educational system should be held accountable for the progress of our children, then you are a Republican. (家族と教育の重視)

If you believe this country, not the United Nations, is the best hope for democracy, then you are a Republican. (強い米国、単独行動主義)

And, ladies and gentlemen, if you believe that we must be fierce and relentless and terminate terrorism, then you are a Republican. (テロへの強硬姿勢)

Now, there's another way you can tell you're a Republican. You have faith in free enterprise, faith in the resourcefulness of the American people and faith in the U.S. economy. And to those critics who are so pessimistic about our economy, I say: Don't be economic *girlie-men*.<sup>3</sup> (企業活動の自由、米国への信頼、楽天主義)

ここに上げられたようなポイントは、共和党の固有の特色というよりも、米国民であれば幅広く共有できる価値観である。意見が割れそうな社会問題を避けながら、「小さな政府」「家族の重視」「強い米国」などを強調し、共和党の大同団結を巧みに呼びかけている。要は、「僕らは同じ共和党(だからブッシュを支持しよう)」ということだ。今年の党大会で、もっとも重要なメッセージであったといっても過言ではないだろう。

結果として共和党大会では、人工中絶、銃規制、同性愛結婚などは話題として避けられ、それぞれ容認派の論者ばかりがPrime Timeを独占することになった。とって、これらを本当に認めてしまえば、コアのブッシュ支持層を敵に回してしまう。

その点、当然のことながらブッシュ陣営に抜け目はない。共和党の2004年版政策綱領(Platform)<sup>4</sup>をよくよく読んでみると、後ろのほうの目立たない場所で、これら社会問題はすべて保守派が満足するような形で取り上げられている。

---

<sup>2</sup> <http://edition.cnn.com/2004/ALLPOLITICS/08/31/gop.schwarzenegger.transcript/index.html>

<sup>3</sup> まったくの余談ながら、シュワルツェネッガー知事は今年7月、予算カットに抵抗する民主党の州議会議員に対し、「Girlie-men」(女みてえな奴ら)と呼んで、「女性やホモを蔑視する不適切な表現」との非難を浴びている。本人はまったく意に介さず、ここでは米国経済が悪いと強調するケリーのことを「Girlie-men」と冷やかしている。

<sup>4</sup> [http://www.nytimes.com/packages/html/politics/gop\\_2004platform.pdf](http://www.nytimes.com/packages/html/politics/gop_2004platform.pdf)

<銃規制> Republicans and President Bush strongly support an individual right to own guns, which is explicitly protected by the Constitution's Second Amendment. (P74)

<人工中絶> And while the vast majority of Americans support a ban on partial birth abortion, this brutal and violent practice will likely continue by judicial fiat. ----- President Bush has established a solid record of nominating only judges who have demonstrated respect for the Constitution and the democratic processes of our republic, and Republicans in the Senate have strongly supported those nominees. (P78)

<同性愛結婚> We strongly support President Bush's call for a Constitutional amendment that fully protects marriage, and we believe that neither federal nor state judges nor bureaucrats should force states to recognize other living arrangements as equivalent to marriage. (P85)

ブッシュ政権としては、党内の左派（穏健派、西部）に表舞台に立たせて「名」を与え、右派（保守派、南部）は陰に引っ込ませて「実」を取らせるという形で、双方の折り合いを図ったようだ。民主党と同様、共和党も党内融和はけっして容易ではないのである。

### 政策綱領を読む～対日政策は？

さて、今回の共和党政策綱領は、"A safer world and a more hopeful America"と題する94ページの大作である。民主党の政策綱領37ページに比べると、さすがに中身が詰まっている。政権与党なのだから、その程度のハンディはあってしかるべきだが、なかでも対アジア政策の部分を読み比べるとあまりの格差に呆然とするほどである。

なにしろ民主党版はわずかに7行。対日政策も"We must maintain our strong relationship with Japan, and explore new ways to cooperate further."の一文で済まされていた。共和党版では、対アジア政策"Across the Pacific"は3 P半、148行もある。なおかつ、これが2000年版の政策綱領を発展させた形になっているところに値打ちがある。

2000年版と2004年版の政策綱領を読み比べると、ブッシュ政権の対アジア政策が4年間でどう変わったか見て取れるので面白い。まずは冒頭部分の比較から。

#### 2000年版

As in every region of the world, America's foreign policy in Asia starts with its allies: **Japan, the Republic of Korea, Australia, Thailand, and the Philippines.** Our allies are critical in building and expanding peace, security, democracy, and prosperity in East Asia joined by long-standing American friends like **Singapore, Indonesia, Taiwan, and New Zealand.**

#### 2004年版

Republicans believe that, as in every region of the world, America's foreign policy in Asia starts with its allies: **Australia, Japan, the Republic of Korea, Thailand, and the Philippines.** In the Asia-Pacific region, these alliances are bolstered by strong relationships with American friends such as **Singapore, India, Indonesia, Taiwan, and New Zealand.**

冒頭、米国にとって重要な国を列挙する部分である。2000年には「日本、韓国、豪州、タイ、フィリピン」が同盟国 (allies)、「シンガポール、インドネシア、台湾、ニュージーランド」が友邦 (friends) として指名されていた。2004年版を見ると、**同盟国の中では日本と韓国を抜いて豪州が先頭に出た。**この3年間、アフガン戦線でもイラク戦争でも、米軍の行くところ常に豪州軍があった。その論功行賞という意味があるのだろう。もうひとつ、10月に豪州のハワード政権が総選挙を迎える。親米路線の是非が問われているわけで、ハワード首相へのアシストの意味もありそうだ。

そして友邦の部分では、2番目にインドが入ったことが注目点である。2000年の政策綱領では、インドについての言及がなかった。しかし2004年版では「ブッシュ大統領の指導力の下、米国はインドとの二国間関係において歴史的な変容をもたらした」で始まる16行の記述があり、**現政権の「インド重視」路線を読み取ることが出来る。**これは対テロ戦争でパキスタンと連携する必要があること、中国を牽制する必要性が生じたことなどが原因といえる。

次に日本に関する部分を比較してみよう。

#### 2000年版

Japan is a key partner of the United States and the U.S.-Japan alliance is an important foundation of peace, stability, security, and prosperity in Asia. America supports an economically vibrant and open Japan that can serve as engine of expanding prosperity and trade in the Asia-Pacific region.

#### 2004年版

Japan is a key partner of the United States and the U.S.-Japan alliance is an important foundation of peace, stability, security, and prosperity in Asia. America supports an economically vibrant and open Japan that serves as an engine of expanding prosperity and trade in the Asia-Pacific region. **Republicans support an American policy in the Asia-Pacific region that looks to Japan to continue forging a leading role in regional and global affairs based on our common interests, our common values, and our close defense and diplomatic cooperation.**

前段の文章はほとんど同じであり、後段では、「共和党は、アジア太平洋地域での米国外交においては、日本がわれわれと共通の利益、共通の価値観、そして緊密な防衛・外交協力に基づき、引き続き地域とグローバルな問題における主導的地位を担うように求める」というメッセージが追加された。**2000年版と同様、「アジアでもっとも重要なのは日本」と明快に位置付けられている。**

こうして見ると、ブッシュ政権の対日重視姿勢は、「ブッシュと小泉の良好な人間関係」だけが理由ではないことが分かる。

#### さらに政策綱領を読む～中国と台湾

2000年版と大きく記述が変わっている部分もあり、その典型は中国に対する評価である。

2000年版の政策綱領は、「アジアにおける米国の主要な挑戦は中国である。中国は自由な社会ではない。中国政府は政治的表現を抑圧し、近隣諸国を脅かしている」とほとんど敵視せんばかりであり、”China is a strategic competitor of the United States, not a strategic partner.”と**クリントン時代の親中姿勢をはっきり否定した。**

しかしこの3年間で、米国は対テロ戦争や朝鮮半島問題で中国の協力を当てにするようになった。その分、文面も気を使わなければならなくなり、2004年版では「安定した平和的で繁栄するアジア太平洋地域を実現するために、中国は戦略上重要な部分を占めるとわれわれは確信する」と穏当な書き出しになっている。それでも最後の部分になると、人権問題や台湾問題を取り上げ、中国に対して釘を刺している。**やはり対中警戒感は抜けておらず、米中関係は大人のゲーム**なのだと認識する必要があるだろう。

台湾に対する表記は、ちょうどそれが裏返った形になっている。2000年版では「共和党大統領は、合衆国の長きにわたる友人であり、純粋な民主主義国である台湾の人々との約束を引き受けるだろう」と手放して持ち上げている。そして最後の方になって、「米国は従来、中国は一つであるという見解を認識（acknowledge）してきた」と、公式見解としての”One-China Policy”をいかにも嫌々といった風で認めていた。

それが2004年版では、「合衆国政府の政策はひとつの中国であり、これは3つのコミュニケと台湾関係法を反映するものである」と、従来から一步踏み込んだ表現で書き出している。それでも最後の部分になると、「合衆国の長きにわたる友人であり、純粋な民主主義国である」という決り文句を残して使っている。米国は台湾の防衛を支援し、WHOなどの国際機関への加盟も後押しすると表明している。**書き方はかなり変えたが、共和党としてのホンネはあまり変わっていない**ようである。

もう一点、政策綱領の通商政策を書いた部分（P51）では、「人民元レート」についての言及があることを指摘しておこう。これも中国の政策当局者が「ドキッ」とするかもしれない部分である。他方、日本の大規模為替介入については言及がない。

We strongly endorse the Bush Administration’s unprecedented effort to persuade and encourage China to desist in its policy of manipulating its currency to give Chinese manufacturers an artificial advantage in global markets.

こうして見ると、ブッシュ政権の対アジア政策は、アーミテージ人脈がきっちり仕切っているせいか、方針は明確であるし、4年前と比べてもブレが少ない。

であれば、**ブッシュが再選される場合は、今日のように緊密な日米関係の継続を期待していい**と見ることができる。ケリー政権誕生の場合は、この点がまったく不透明になってしまふ。米国の対アジア政策だけを判断材料とするならば、日本としてはブッシュ再選の方がありがたいというのが、今週号の結論となる。

< 今週の”The Economist”誌から >

”Je ne regrette rien”

「我、後悔せず」

Cover story

August 28<sup>th</sup> 2004 P.9-10

\* 共和党大会を目前に控え、今週の”The Economist”誌はブッシュ政権の特集号。巻頭のコラムは何と評するか。注目です。

< 要旨 >

4年前の共和党大会で、ブッシュはみずから「温情ある保守主義」と売り込んだ。外に向かつては控えめで強い外交を。内には大型減税を。教育などの社会問題にも多くを語った。以前の党大会に比べ、キリスト教右派の声は小さくなり、同性愛者やマイノリティにも耳を傾けた。しかも選挙結果は僅差であり、ブッシュ政権は穏健派になると思われた。

しかるに今、世間の見る眼は違う。「事故による大統領」は時代を変える大統領となり、国内の分裂はクリントン時代よりも深まった。86%の共和党員はブッシュを支持し、民主党員は8%しか支持しない。ブッシュは政策によって分裂を加速した。イラク戦争と政府の肥大だけではない。教育、医療、ミサイル防衛、A I D S 対策、同性愛結婚、市民権などで、過激な変革を目指している。温情ある保守主義は矛盾が一杯だ。政府の拡大はクリントン時代以上であり、中東政策は控え目ではない。同性愛結婚を禁じて温情はどこへ行くのか。

ケリーがきわどく追い上げる中で、NYの党大会でのメッセージは前回と変わらない。シュワちゃんやジュリアーニなどの穏健派に見せ場を作るなど、無党派を取り込む工夫は見られる。だがブッシュはびくともしていない。我ことにおいて後悔せず、と。

本誌が見るところ、ブッシュ外交は概ね正しい。単独行動主義批判の多くは行き過ぎたものだ。ブッシュは同盟国を求めているし、クリントン時代の先送り体質に新風を送り込んだ。京都議定書離脱やA B M条約廃棄も不評ではあったが、理解はできる。

もっとも重要なのは「9/11」である。その後のブッシュの外交的決断は正しかった。この戦争は米国と西側社会に向けて宣戦された。ブッシュはこれが文明間の戦争ではないとしつつ、アラブ社会の変革の必要を知らしめた。彼はアフガンのアルカイダの本拠を破壊し、そしてイラク侵攻を決断したのである。多くの同盟国では不評だが、だから間違いとはいえない。ケリーに期待する国もあるようだが、どっこい彼はブッシュとそう違わない。

たしかに間違いもあった。イラクの大量破壊兵器保持について、嘘はつかなかったまでも国をミスリードした。フセインをアルカイダに結びつけたのも誇張だった。その他、執行上の間違いが多々あった。イラクでは危険な独裁を破壊したが、戦後の再建で失敗した。アブグレイブの虐待を認めず、責任者ラムズフェルドも辞任していない。これらの間違いは、経験の問題でもある。本誌は対テロ戦争以外の分野で異議を申し立てたい。

現大統領は評判に反し、鉄鋼関税と農業法で保護主義圧力を強めた。財政政策も誉められない。ブッシュはクリントンから、財政黒字とともにバブル崩壊も引き継いだ。不況を避け



るためには、赤字拡大が必要だったと言うだろう。だが、今の赤字は一過性のものではない。減税の一方で支出は大盤振る舞い。ブッシュは大きな政府を認める保守なのだ。次期大統領は、ベビーブーム世代の引退に備える必要がある。4年前、ブッシュは年金の民営化を唱えたが、ほとんど前進はない。しかも高齢者医療の便宜を拡大し、財政負担を増やしている。

社会政策にも問題がある。米国の保守主義運動は西部の反政府主義と、南部の道徳主義の一致によるものだ。ブッシュは不寛容な右派に大きな権限を与えている。彼の信仰の誠実さは本物だが、2000年にそれを許した者も今回は別であろう。これについては本誌も同感だ。

ブッシュの1期目を評するならば、成功も失敗も籠の中にある。ブッシュが2期目にふさわしいかどうかを論じるには、ケリーがより良い選択であるかどうかを見極めなければならない。ケリーがボストンで試みたように、ブッシュはNYで新機軸を打ち出す必要がある。

### < From the Editor > アテネ五輪新世代

この夏の思い出といえば、何と言ってもアテネ五輪。金メダルが16個で過去最多タイというのも驚きですが、世界第5位にランクされたというのがとにかくスゴイ。日本がドイツよりも多いなんて、そんな快挙を事前に誰が想像し得たでしょうか。

気になったので、今大会のメダリストたちの生年月日を調べてみました。

山本 博	1962年10月31日 (アーチェリー・銀)
室伏 広治	1974年10月 8日 (陸上・金)
野村 忠宏	1974年12月10日 (柔道・金)
立花 美哉	1974年12月12日 (シンクロ・銀)
田南部 力	1975年 4月20日 (レスリング・銅)
轟賢 二郎	1975年 9月 1日 (セーリング・銅)
関 一人	1975年 9月11日 (セーリング・銅)
谷(田村) 亮子	1975年 9月 5日 (柔道・金)
伏見 俊昭	1976年 2月 4日 (自転車・銀)
阿武 教子	1976年 5月23日 (柔道・金)
武田 美保	1976年 9月13日 (シンクロ・銀)
井上 謙二	1976年11月 5日 (レスリング・銅)
浜口 京子	1977年 1月11日 (レスリング・銅)
塚原 直也	1977年 6月25日 (体操団体・金)
米田 功	1977年 8月20日 (体操団体・金/鉄棒・銅)
井上 康生	1978年 5月15日 (柔道)
内柴 正人	1978年 6月17日 (柔道・金)
野口みづき	1978年 7月 3日 (マラソン・金)
山本 貴司	1978年 7月23日 (水泳・銀銅*)
長塚 智広	1978年11月28日 (自転車・銀)
上野 雅美	1979年 1月17日 (柔道・金)
井上 昌己	1979年 7月25日 (自転車・銀)
鈴木 桂治	1980年 6月 3日 (柔道・金)
鹿島 文博	1980年 7月16日 (体操団体・金/鞍馬・銅)
水鳥 寿思	1980年 7月22日 (体操団体・金)
横澤 由貴	1980年10月29日 (柔道・銀)
富田 洋之	1980年11月21日 (体操団体・金/平行棒・銀)
中西 悠子	1981年 4月24日 (水泳・銅)

谷本 歩実	1981年 8月 4日	(柔道・金)
伊調 千春	1981年10月 6日	(レスリング・銀)
塚田 真希	1982年 2月 5日	(柔道・金)
柴田 亜衣	1982年 5月14日	(水泳・金)
中村 礼子	1982年 5月17日	(水泳・銅)
泉 浩	1982年 6月22日	(柔道・銀)
北島 康介	1982年 9月22日	(水泳・金金銅*)
吉田 沙保里	1982年10月 5日	(レスリング・金)
奥村 幸大	1983年 5月 9日	(水泳・銅*)
伊調 馨	1984年 6月13日	(レスリング・金)
森田 智己	1984年 8月22日	(水泳・銅銅*)
福原 愛	1988年11月 1日	(卓球)

\*は水泳男子メドレーリレー

どうも1978年生まれあたりに断層があるらしく、それより上は古き良きタイプのスポーツマンたちなのですが、それより下が新世代のようです。彼らの特色はこんな感じ。

組織や過去の重圧を感じていない。水泳の北島は、「チーム北島」を背中にして戦っているはずなのに、勝ってホッとした、ではなくて「チョー気持ちいい」。さすがに「自己チュー」。「イエイ、勝っちゃった」と言った柔道家もいましたね。

自分に対する応援を、素直に自分のモチベーションに転化できる。プレッシャーに弱い日本人アスリート、という過去のパターンは微塵もない。応援を受けることを心から喜ぶ。そして本番で自己ベストを出してしまう。

二世や家族ぐるみが多く、小さい頃からスポーツに取り組んでいる。室伏、塚原、浜口など「親の業」を受け継いでいる選手もあるけれど、押しなべてそういうことに対して迷いや抵抗がないように見える。

勝ちにこだわる姿勢にためらいがない。福原愛が1ポイント取るたび、「タァーッ！」と奇声を発するのにビックリしました。ベテラン世代よりも集中力の面で優れている。勝負なんだから、「綺麗に勝とう」などとは考えない世代の方が強いに決まっている。

日本もなかなかやるもんだ、と感じることができた夏でした。アテネで登場した新世代の活躍に今後も期待したいと思います。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までお願いします。

〒107-0052 東京都港区赤坂2-15-27 <http://www.niri.co.jp>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)5520-2195 FAX:(03)5520-4954

E-MAIL: [yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com](mailto:yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com)